

トレド聖堂参事会図書館の蔵書について

井 上 泰 山

一 はじめに

(一) 調査の目的と期間

私が漢籍調査のためにマドリッド近郊の都市トレドを訪れたのは、日本への帰国を目前に控えた2005（平成17）年9月5日、月曜日のことであった。当時の私は、関西大学から在外研究員の資格を与えられ、4月からおよそ半年間、スペインとポルトガルの主要都市を巡り、大学の図書館や公文書館をはじめ、王宮や修道院の図書館、さらには聖堂内に付設されている図書室などに直接足を運んで、当該機関における漢籍の所蔵調査を行っていた。首都マドリッドに拠点を置いていた私は、そこから日帰りできる距離にあるトレドの聖堂図書館に関しては、いつでも行けるという気軽さも手伝って、帰国間際まで調査の実施を延び延びにできてしまっていたのである。ただ、一方では、帰国前に必ず訪れなければならない、という一種の使命感も心の片隅に存在していた。というのも、トレドの聖堂図書館に関しては、前世紀に外国の研究者が調査のために訪れた記録が、断片的ながら残されており、それによると、現在の状況はいざ知らず、およそ50年前には、中国から伝わって来た複数の漢籍が保管されていたことが確認できるからである。

(二) トレドの概要

列車で行く場合、トレドへの直行便はマドリッドの北の玄関口チャマルティン駅から発車し、一日に4便が出ている。9月5日の朝、いつもより早起きし

た私は、第一便である8時半発の列車に乗り込んだ。普段ならばおよそ1時間40分で直接トレド駅に到着するところであるが、生憎当時は長期間にわたってトレド駅ホームの改修工事が行われており、一つ手前の駅アルゴドールで降りて代行バスに乗り換えなければならない。10時5分過ぎにトレド駅前の広場に到着してバスを降りた私は、早速目当ての聖堂図書館めざして行動を開始した。スペインの地方都市にはよくあることだが、列車の駅から街の中心部までは少し距離があり、駅前から発車する路線バスを待つ観光客も少なくない。ただし私の場合はそれ以前に既に何度も観光目的で当地を訪問していたため、暑い陽射しに照らされたまま、いつ来るかわからないバスを待つ気にはなれず、ただちに徒歩で市街地へと向かうことにした。

トレドの街は全体が小高い丘の上であり、周囲を包み込むようにタホ川がゆったりと流れている。駅から徒歩で市内に入るには、通常、川面を見下ろしながらアルカンタラ橋を渡ることになる。中世の趣を色濃く残す石造りの門をくぐって、市街地の周囲を巡るようにして走る車輛用の道路を横切ると、後はひたすら急な坂道を登らなければならない。再三息切れしながら、休み休み登ること、およそ15分。サンタ・クルス美術館を右に見ながら、胸突き八丁の坂道を上りきると、市民の憩いの場である三角形のソコドベール広場に着く。木陰に置かれたベンチで一休みした私は、流れ落ちる汗をふきながら地図を広げ、念のため、目指す聖堂の位地を再確認した。もともとそれほど大きくはないトレドの街のこと、地図で見ると、目指す聖堂は目と鼻の先である。ただ、肝心の図書館に関しては市販のガイドブックの類には何のコメントもない。聖堂を訪れる観光客は数多くいても、そこに併設されている図書館にまで入り込み、しかも中国の書物を閲覧しようなどという物好きは少ない。観光ルートに適さない以上、ガイドブックに何の記載もないのはむしろ当然のことである。10時半過ぎ、気を取り直した私は、とりあえず一般観光客の辿るルートに従って聖堂の内部に足を踏み入れてみることにした。

(三) 図書館を尋ねて

市街地のほぼ中心部に聳え立つ聖堂（カテドラル）は、13世紀の始め、フェルナンド3世の時代に建設が始められ、その後およそ200年の歳月をかけて完成しただけあって、スペイン国内でも有数の、ゴシック様式を代表する荘厳な建築物として知られている。実際、サラマンカやレオンの聖堂と較べて少しも見劣りしないほどの、威厳を湛えた壮大な建物である。トレド観光に訪れた者は、大抵、真っ先にこの聖堂を訪れる。大勢の観光客に紛れて、私も聖堂の内部に足を踏み入れてみた。ただ、一般の観光客は奥へ奥へと進んでいくが、私の場合は参観が目的ではないので、入り口近くの案内所に静かに座っている神父らしき人物に英語で来意を告げ、図書館の場所を尋ねてみた。しかし、残念なことに、相手は英語を全く理解しない。スペインではあまり英語が通じないことは経験的に知っていたものの、肝心の時に言葉が通じないとなると、やはり少々困惑してしまう。しかし、いつまでも落胆しているわけにもいかず、日本人、研究者、図書館、中国の本、など、乏しいスペイン語の語彙を駆使して図書館までの道のりを何とか聞き出そうとしたものの、一向に納得のいく返事は返ってこない。しかも、相手はかなりの高齢で視力が弱っているせいか、こちらが広げた地図上で図書館の位地を示してもらおうとしても、聖堂そのものの位地を特定することさえおぼつかない様子で、図書館の場所についてもあちらこちらに指が動き、一向に埒があかない。やむなく、だいたいの見当がついたところで、鄭重に礼を述べてその場を立ち去った。

次に私が訪れたのは、聖堂の入り口から目と鼻の先にある「ARCHIVO DIOCESANO」であった。神父の言葉の端々に現れた「ARCHIVO（記録保管所）」という単語を頼りに、目に入る限りの看板の文字を辿って歩いたところ、幾つかの看板に交じって上記の文字が目にとまったのである。守衛らしき人に来意を告げると、相手は快く私を中に招き入れ、親切にも目指す建物の前まで案内してくれた。2階に上がると一人の老人が別の人物と盛んに立ち話をしている。話の邪魔をするわけにもいかず、立ったまま静かに待つことおよそ10分。ようやく話が終わった頃合いを見計らって、簡単な自己紹介をした後、単刀直

入、中国の本はあるか、と切り出した私に対して、幸いこちらの来意と目的が伝わったらしく、ここには無い、と言つぶやいた後、一枚のメモ用紙を取り出し、何やら地図らしきものを書いてくれた。見ると「SEMINARIO METROPOLITANO」という所に行くように指示がしてある。そこがどういう場所なのか全く見当はつかなかったものの、漢籍はそこにある、といわんばかりのアドバイスの仕方にすっかり気を好くした私は、ここでも鄭重に礼を述べ、再び地図を頼りにしばらく入り組んだ路地を歩き回った。ものの5分とかからないうちに目的地に着き、案内係の男性に来意を告げると、しばらく待たされた後、年若い男性が現れた。今度は英語が通じる相手であったため、やや詳しく当地来訪の目的を告げ、漢籍の有無を尋ねたところ、意外にも、ここは市民向けの学校であり、もともと中国の書物など無い、との返答であった。自身たっぷりの態度でアドバイスしてくれた先程の老人の情報はいったい何だったのか。私は途方に暮れてしまった。またしても振り出しにもどったわけである。やむなく、くだんの「ARCHIVO DIOCESANO」の入り口までもどったところ、再び中から受付の男性が現れ、もう一箇所それらしい所があるから、試しにそこへ行って見るように、との指示を受けた。再三にわたって空振りをおこなされた私は、半ば諦めかけてはいたが、ここまで来た以上、手ぶらで引き返すのも癪だという思いも強く、無駄足を覚悟で指示された場所に向かうことにした。

聖堂の入り口からいったん登りに向かい、左に折れて狭い路地を少し南に下ると、立ち並ぶ建物の一角に小さな木製のドアが設けられており、そのドアの左手の壁に、これまた極めて小さな文字で「ARCHIVO Y BIBLIOTECA CAPITULARES (聖堂参事会図書館)」と刻んであるのが目に留まった。今度こそ目指す場所に違いない。私は内心小躍りした。しかし、ドアには鍵がかかっている、押しても引いても開かない。もちろん、受付の係員もいない。ヨーロッパの場合、多くの都市の住居がそうであるが、外部から自由に入れる構造にはなっておらず、集合住宅の1階に設置してあるブザーを押して来意を告げ、中からの対応を待たなければならない。考えてみれば、初めて訪れる機関に紹

トレド聖堂参事会図書館の蔵書について（井上）

介状も持たずに行く私も無謀といえは無謀ではあるが、幸い、スペインでは研究者に対してはかなり優遇してくれることが多く、その日も、片言のスペイン語で来意を告げると、特に怪しまれることもなく、頑丈に閉まっていたドアの自動ロックが解除され、中に入ることができた。薄暗い螺旋階段を歩いて2階に上がると、中は意外に広い吹き抜けの回廊になっており、1階の中庭には緑が生い茂り、その中央に小さな噴水が設けられている。天を圧する聖堂の尖塔も間近に見える。左手の小さなドアを入ると、そこはまさしく、「聖堂参事会図書館」の一室であった。時計を見ると11時半。狭いトレドの街を彷徨うこと1時間、私はようやく目指す地点にたどり着いたのであった。

本稿は図書館にたどり着くためのガイドブックではない。にもかかわらず、私がこれまで事細かに図書館到達までの経緯を述べたのは、およそスペインで外国の書籍、それも東洋の古典籍に関する調査を行う場合、大抵、今回と似たような状況に置かれるのが一般的であることを、まず記録しておきたかったからである。西洋の端に位置するイベリア半島で、漢籍の所蔵調査を行うとはどういうことか、まずはそこにたどり着くことさえも容易でないことを、実際に体験した者として是非とも記録しておきたいのである。スペイン語に通じないことにも難渋した原因の一端はあるのかも知れないが、これまでの経験からすると、仮に言葉ができたとしても、スペイン国内で漢籍の有無を尋ね歩く際には、程度の差はあるにせよ似たような状況が起こり得る。考えてみれば、日本国内に突然現れたスペイン人に、ポルトガルの古典はどこにありますか、と尋ねられても、誰もにわかには返答しにくいのと事情は同じことであろう。従って、スペインで漢籍の調査を行う際に大切な事は、至極平凡な言い方ではあるが、忍耐強く執拗に追い求め、決して諦めないこと、この一点にあると思われる。

それはさておき、勿論、成果そのものは非情であって、どんなに苦勞して目的地にたどり着いたとしても、そこに見るべき資料が無ければそれまでであり、単なる無駄足に終わることもしばしばである。ただ、ことスペインに関しては、情報開示のあり方という点で、通常日本で考えるのとは大いに異なる状況にあるため、初めから一定の成果を期待して訪れることは難しく、時には無駄足

に終わることも覚悟した上で敢えて訪問しなければならないことが多い。そのことも、ここで敢えて付け加えておきたい。

ところで、肝心の、トレドにおける調査の結果はどうであったか。実を言うと、苦勞して歩き回った甲斐あってか、幸いにも予期した以上の成果を得ることができた。現地で幾つかの貴重な資料を入手し得たばかりでなく、漢籍の所蔵状況についても、その全貌を明らかにすることができたのである。以下に章を分けて詳しく報告することにしたい。

二 トレド聖堂参事会図書館の概要

(一) 図書館の正式名称と所在地

トレドの聖堂内に付設されている図書館の歴史や蔵書の傾向、並びに漢籍の所蔵状況などについて述べる前に、まずは図書館の正式名称と所在地、閲覧室の状況、現任のスタッフ、及び利用者に対して提供されているサービス内容などについて一通り紹介しておくことにする。規模の大きな公立の図書館とは異なり、その存在自体もあまり知られていない現況にあっては、まず利用者の立場から見た図書館の基本的な輪郭を伝えておく必要があると判断されるためである。

まず、図書館の名称に関してであるが、これについては、現地で入手した文書に記してあるスペイン語の表示「ARCHIVO Y BIBLIOTECA CAPITULARES (Catedral Primada de Toledo)」が正式な名称であろうと思われる。既述の如く、入り口のドアにもそのように表示されているところから見て、まず間違いない。それを忠実に日本語に訳すと「トレド聖堂参事会の文書保管所並びに図書館」となるが、やや長いので、本稿では「トレド聖堂参事会図書館」、または更に短くして「聖堂参事会図書館」と呼ぶことにする。

次に所在地であるが、これについては議論の余地はない。やはり、現地で入手した文書に記載されている以下の地名表示が、聖堂参事会図書館の正式な所在地である。

Hombre de Palo, 2 Apartado 295 45002. TOLEDO

(二) 閲覧室の状況とサービスの内容

閲覧室の状況やスタッフ、並びに利用者に対するサービス内容についても簡単に触れておこう。始めに述べたように、聖堂参事会図書館は聖堂に隣接した建物の2階部分の一角にあり、正方形の回廊に囲まれた北側の一部が閲覧室及び書庫になっている。回廊の他の部分は、主として聖堂関係者の生活空間として使われているらしく、時折、黒い道服をまとった修道女達が小声で話しながら行き来する姿を目にする。

聖堂参事会図書館の表示が掛けられた小さなドアを入ると、左手に受付係の小机と図書搬出用の机が併置されており、右手が閲覧室になっている。閲覧室とはいっても、10畳にも満たない細長い部屋の中央部に、やや大きめの木製の机が1台置かれているだけで、椅子はわずか8脚しかない。この点だけから見ても、一般閲覧者への開放度と利用状況がある程度推測できる。後にわかったことだが、同図書館は主として聖堂関係者や研究者向けに開放されているらしく、一般市民へのサービスに関してはあまり積極的でないようである。事実、私が調査のために訪れた5日間の総利用者は、私を含めてわずかに延べ5人。毎日ほぼ同じ顔ぶれであったが、時には来館者が2人だけのこともあり、日によっては私一人が閲覧室を独占している状況であった。閲覧室の周囲には幾つかの書架が置かれていて、当該機関発行の書籍や目録、教会関係の雑誌などが配架されている。それらの書物は自由に閲覧することができる。

参事会図書館の現任スタッフは4人である。館長はアンヘル・フェルナンデス・コリヤード (Dr. Angel Fernandez Collado) 氏。年齢は聞き忘れたが、見たところ60前後の堂々とした紳士で、当地で入手した聖堂参事会図書館の概要説明書によれば、氏は聖堂参事会の会員でもあるらしい。館長以外に館員が3人勤務している。カルメーロ・サンチェス・サンチェス (D. Carmelo Sanchez Sanchez) 氏、アルフレッド・ロドリゲス・ゴンサレス (Dr. Alfredo Rodriguez Gonzalez) 氏、及び、イシドロ・カスタニェーダ・トルデーラ (Isidoro Castañeda Tordera) 氏の3人である。受付に座っているのは20歳台と見られる若手の研究者イシドロ氏で、来訪者との応対や閲覧関連事務、

閲覧者からの質問が出た際の館長への取り次ぎなど、利用者に対する業務全般を担当している。氏の正式な職位は不明であるが、技術員を兼ねており、同館で博士号の資格を得るために修行中とのことであった。

最後に開館時間とサービス内容について述べておこう。案内書によれば、開館時間は平日（月曜日から金曜日まで）の午前11時から午後2時までの3時間とある。ただし、スペインの生活リズムからすると、午後2時頃から昼食の時間が始まるので、当地の感覚では開館時間は午前中の3時間のみということになる。過去の経験から言うと、宮殿や修道院の図書室は大抵似通った状況にあり、午後は閉館となる所が多い。しかも、7月・8月の2箇月間は全て閉館となる他、聖堂の特別行事やトレドの祭日にあたる場合なども臨時休館となるらしい。些か個人的な話ではあるが、開館日の情報を全く持たないまま突然訪問した私であったが、帰国間際の9月に入ってから訪問したことは却って幸いであった。仮に訪問時期が7月か8月であったならば、既述の如く、炎天下を苦勞して尋ね歩いた挙げ句、何とか入り口までたどりついたとしても、そこで初めて長期閉館の事実を知り、そのまますごすごと退散する事態に陥っていたであろう。いや、それどころか、休館期間の情報さえも入手できないまま、トレドでの調査そのものをすっかり断念していたかも知れない。全くの偶然とはいえ、幸運の神に導かれたとしか考えようがない。

利用者に対するサービスとしては、蔵書並びに手抄文献の閲覧は勿論、場合によっては複写やマイクロフィルム、デジタル画像などによる原文の入手も可能であるが、当然の事ながら、全て有料であり、文献の種類によっては、例えば中世の典礼儀式関係の古抄本など、電子複写が許可されないものもある。外部への貸し出し業務を行っているかどうかは、確認し忘れたため明らかでない。ただ、上に述べた閲覧室の状況、及び5日間に実見した利用者の動静から判断する限りでは、外部から訪れた利用者に対しては閲覧業務のみを行っており、貸し出し業務を行っているようには見受けられない。

以上、利用者の目を通して見た聖堂参事会図書館の一般的業務内容を紹介した。続いて、同館の蔵書の状況について、現地で入手した幾つかの資料をもと

トレド聖堂参事会図書館の蔵書について（井上）

にして詳細に報告することにする。言うまでもなく、本稿の本来の目的は、聖堂参事会図書館の蔵書について、収書の経緯や蔵書量の情報を提供することにある。とりわけ、従来明らかにされていない漢籍の所蔵状況を報告することにある。

三 トレド聖堂参事会図書館の蔵書

本章では、聖堂参事会図書館の簡単な歴史と収書の経緯、現時点で利用可能な目録とその作成者、及び、同館に現存する主要な文庫のうち、特に漢籍と関連の深い「セラダ文庫」について述べる。

(一) 依拠する資料について

記述にあたっては、筆者が調査の過程で直接入手した以下の3種の資料に依拠する。はじめに、資料の論題・著者名・出典・刊行年を示しておく。

(a) 「LA BIBLIOTECA DE LA CATEDRAL DE TOLEDO SUS INSTRUMENTOS DE CONSULTA / ANGEL, FERNANDEZ COLLADO / 『JORNADAS BIBLIOTECARIAS DE CASTILLA — LA MANCHA』 / 1998年

「トレド大聖堂の図書館～その閲覧手段」 / アンヘル・フェルナンデス・コリヤード / 『カスティーリャ・ラ・マンチャ図書館講習会草稿』 / 1998年

(b) 「LA COLECCION DEL CARDENAL ZELADA」 / JOSE JANINI Y RAMON GONZALVEZ / 『CATÁLOGO DE LOS MANUSCRITOS LITÚRGICOS DE LA CATEDRAL DE TOLEDO』 / 1977年

「セラダ枢機卿文庫」 / ホセ・ハニーニ・イ・ラモン・ゴンサルベス / 『トレド大聖堂の典礼に関する手稿本の蔵書目録』 / 1977年

(c) 「ZELADA, Francisco Javier」／F.J.Ruiz／『*DICCIONARIO DE HISTORIA ECLESIASTICA DE ESPAÑA*』／1975年

「セラダ・フランシスコ・ハビエル」／F.J.ルイス／『スペイン教会史事典』／1975年

言うまでもなく、これら3種の資料は全てスペイン語で書かれている。本来ならば筆者自身がスペイン語を習得した上でこれらの資料の内容を細かく紹介すべきところではあるが、遺憾ながら、現時点ではそこまでの時間的余裕はない。よって、まずは上記の資料の記載内容を然るべき人物に頼んで日本語に翻訳してもらい、その上で必要な情報を抽出することにした。幸いなことに、この件に関しては、スペインのサラマンカに調査に赴いた際、全く偶然の経緯から、適任者を得ることができた。サラマンカ大学大学院博士課程に留学中の高田雄太氏がその人である。氏は現在、東京大学の大学院博士課程に在籍中で、専門はスペイン思想、とりわけオルテガ・イ・ガセットの思想を研究しているとのことであるが、スペイン語にも堪能であり、帰国前に上記の資料の翻訳を依頼しておいたところ、間もなく日本語の翻訳原稿が私のもとに送られてきた。ただし、原文には通常のスเปน語とは異なるやや特殊な語彙や言い回しが見られるらしく、訳語の一部に対して疑問が呈されているものの、そのことが却って、翻訳に対する氏の慎重な姿勢を伺わせるものであり、信頼度を増す結果となっている。

些か不遜な物言いではあるが、仮にスペイン語に通じなくても、市販の西日辞典を引けば、大雑把な内容だけは何とか把握できるであろうし、それでも全く情報が無いよりも遙かに有益に違いない。しかし、独力で臨んだのでは、以下に記すような詳細な情報を引き出すことは到底望めない。今回の報告を草するにあたって本章の記述を加えることができたのは、ひとえに高田氏のご協力の賜物である。多忙な折にもかかわらず快く私の個人的な依頼を引き受けてくださった氏に、この場を借りて深甚なる感謝の意を表したい。

なお、以下の(二)及び(三)の記述にあたっては、基本的に高田氏の翻訳

トレド聖堂参事会図書館の蔵書について（井上）

に依拠したものの、氏の訳文を一字一句そのまま拝借したわけではなく、必要な情報を適宜選び取って、それを私自身の言葉になおして文章化したものである。従って、文責はあくまでも筆者自身にあり、事実誤認や不適切な用語などがあれば、それは全て筆者が責めを負うべきものである。但し、(四)については、そこで改めて断っている通り、文体の統一を図るために幾つかの字句を改めた他は、ほぼ全面的に氏の訳文に依拠して記述していることも付け加えておきたい。

(二) 収書の歴史と現在の蔵書

現館長であるコリヤード氏によって書かれた前掲資料 (a)「トレド大聖堂の図書館～その閲覧手段」によれば、11世紀末、当時の典礼儀式の改変に伴って徐々に関連書籍がトレドの地で収集され始め、その後15世紀末に聖堂が完成して以来、何世紀にもわたる組織の改変・拡大を経て、現在のような、研究者や専門家が自由に閲覧できる体制が整ったとされる。

現在の聖堂参事会図書館の蔵書を構成しているのは、トレドの旧文庫、セラダ文庫、及びロレンサーナ文庫の三つの大きな蔵書群であり、合計2300冊の手稿本と980冊の印刷本を所有している。典礼に関する蔵書を除けば、トレドの旧文庫は聖堂と何らかの繋がりをもつ人々からの寄贈を核として徐々に形成されたものである。また、セラダ文庫及びロレンサーナ文庫に関しては、前者はスペイン人の血を引くヴァチカンの司書であったセラダ枢機卿の私有に係る手稿本の数々が、そして後者は、ロレンサーナ枢機卿がナポレオンによる教皇領占領期にローマで購入した一連の写本群が、1798年から1799年にかけて相継いで聖堂に寄贈されたものである。

第一共和制の時期に、聖堂参事会図書館の蔵書は全て政府によって一時的に差し押さえられたものの、その後の王政復古後に再び聖堂に返還された。ただし、その当時、研究や整理のためにマドリッド国立図書館（現在のスペイン国立図書館）に一時的に預けられていた220冊の手稿本は時の権力による没収を免れ、現在もなお同図書館に保管されている。また、差し押さえの際、移送中

に一部の貴重な書籍や手稿本が失われた。

(三) 現存目録とその作成者

聖堂参事会図書館の蔵書に関しては、これまで、手稿本や印刷本の内容にもとづいて各種の索引や蔵書目録が作成され、研究者に大いなる利便を提供している。蔵書に関する最初の目録は、1808年、P・ロレンソ・フリーアス (P. Lorenzo Frías) が手書きによって作成したもので、アルファベットを基準として体系的に配列され、しかも分野別に整理されているため、現在もなお文書資料としての価値を失っていない。この目録の中には、前掲セラード文庫及びロレンサーナ文庫の蔵書も収録され、それに伴って、旧蔵書の登録番号は全て改められた。その後今日に至るまで、改編と出版が幾度も繰り返され、より科学的な内容、統一のとれた記載を目指した各種の目録が作成されるに至った。

以下に、聖堂参事会図書館の蔵書に関する現存目録とその作成者を、完成年度の古い順に挙げておく。作成者を [] 内に示し、目録名は『 』内に斜体で記す。また、参考までに、各々の目録の内容についての簡単なメモを付しておく。

- 1 [P. Lorenzo Frías] 『*Manuscritos de la Biblioteca de la Santa Iglesia de Toledo, Primada de las Españas, I—II (Manuscritos), III (Impresos)*』 1808

* サンタ・イグレスシア図書館の手稿本関係目録

- 2 [Jose Maria Octavio] 『*Catálogo de la Librería del Cabildo de toledano, I (Manuscritos), II (Impresos)*』 1903-1906

* トレド参事会図書館の目録

- 3 [A. López-L. M. Núñez] 『*Descriptio codicum franciscalium Bibliothecae Ecclesiae Primatialis Toletanae*』 1917-1920

* フランシスコ会の写本に関する目録

- 4 [V. Beltrán de Heredia] 『*Los manuscritos de Santo Tomás en la*

Biblioteca Capitular de Toledo』 1926

* 聖トマスの手稿本についての目録

5 [J. M. Millás Vallicrosa] 『*Los manuscrits hebraicos de la Biblioteca Capitular de Toledo*』 1934

* ヘブライ語の手稿本の目録

6 [J. M. Millás Vallicrosa] 『*Els manuscrits lullians de la Biblioteca Capitular de Toledo*』 1934

* ラテン語の手稿本に関する目録

7 [A. Millares Carlo] 『*Los códices visigóticos de la catedral toledana. Cuestiones cronológicas y de procedencia*』 1935

* 西ゴート時代の写本の目録

8 [J. M. Millás Vallicrosa] 『*Las traducciones orientales en los manuscritos de la Biblioteca de la Catedral de Toledo*』 1942

* 東洋の翻訳本についての目録

9 [E. Pellegrin] 『*Manuscrits des auteurs classiques latins de Madrid et du Chapitre de Toléde*』 1953

* ラテン語の古典著書についての目録

10 [A. García y R. González] 『*Los manuscritos jurídicos medievales de la Catedral de Toledo*』 1970

* 中世の法律に関する手稿本の目録

11 [J. Janini- R. González] 『*Catálogo de los códices litúrgicos de la Catedral de Toledo*』 1977

* 典礼に関する写本の目録

12 [R. González Ruiz] 『*Los códices mozárabes toledanos en los inventarios antiguos de la Biblioteca Capitular de Toledo*』 1978

* モサラベの写本についての目録

13 [K. Reinhardt-R. González] 『*Catálogo de códices bíblicos de la Catedral de Toledo*』 1984

* 聖書に関する写本の目録

- 14 [L. Rubio Fernández] 『*Catálogo de los manuscritos clásicos latinos existentes en España*』 1984

* スペインにおけるラテン語の古典的手稿本についての目録

これまでに作成された以上14種類の目録の内容を概観しただけでも、トレド聖堂参事会図書館がいかに豊富で貴重な手稿本を所蔵しているかが理解される。目録の作成により、研究者は必要に応じて同図書館の膨大な資料や蔵書を容易に検索することが可能となるわけで、今後引き続きあらゆる分野の目録が作成され、研究者にとって利用し易い環境が整えられることが期待される。

(四) セラーダ枢機卿とその文庫について

既に紹介したように、トレド聖堂参事会図書館の蔵書は三つの大きな蔵書群から構成されている。そこには刊本の他、数多くの貴重な古写本も含まれているが、筆者の最大の関心事はあくまでも中国の古典籍にあり、わざわざ調査に赴いた目的も、そこに果たして、かつて中国から流れてきた書籍が今なお保管されているかどうか、という一点にあった。ところが、幸いなことに、調査を進めるにつれ、かつて中国から流入した漢籍の一部が今なお失われずに保管されており、しかも、それが含まれているのは他でもなくセラーダ文庫であることが判明したのである。所蔵漢籍の具体的な書名については章を改めて述べるが、後の記述の便を図るためにも、ここで、セラーダなる人物の生涯と、その蔵書を収めたセラーダ文庫の概要に関して、一応の輪郭をつかんでおくことが必要であると思われる。

聖堂参事会図書館での調査の過程で、セラーダ氏自身の来歴、及び、氏が図書館に寄贈した蔵書の内容に関してかなり詳細に記述した資料を入手することができたので、まずその点について報告しておくことにする。なお、既に断っておいたように、以下の文章は、細かな字句の改変を除いて、基本的に高田雄太氏の翻訳に依拠したものである。

はじめに、前掲 (c) の『スペイン教会史事典』の記事によって、セラード氏の生い立ちと社会的活動の概要を紹介しておくことにする。

セラード、フランシスコ・ハビエル、(ローマ、1717年8月27日—1801年12月19日)、枢機卿。1740年10月23日、司祭の叙階を受けた。1766年12月22日、Petraの肩書きを持つ大司教に任命された。1766年12月28日、ローマにおいて、Clemente13世から司教として聖別された。1733年4月26日、San Martín in Montibusの肩書きとともに枢機卿になる。1793年6月17日、Santa Práxedesという肩書きに変わる。

スペイン国外で生まれたが、スペイン人の血を引く。ニコラス・デ・アサーラは、ゴドイへの手紙(フィレンツェ、1798年4月12日)の中で、彼について次のような表現を用いている。「スペイン人の血を引く」。彼は18世紀のイタリアにおいて、学問の偉大な研究者であり擁護者であった。当地で、真の意味でのメセナを行った。彼は、膨大で厳選された文庫、骨董美術館、徽章や貨幣のコレクション、物理学の有名な実験室を所有した。彼の宮殿には、多くの教養人が頻繁に出入りした。Colegio Romanoの天文観測所の建立は、セラード枢機卿に負うところが大きい。アルバーニ枢機卿の死を機に、彼に代わって、ヴァチカンの司書に任命された(1779年)。彼の尽力と統率力のもと、ヴァチカンの図書館は目覚ましい発展を遂げた。

イエズス会の廃止論を支持したので、カルロス3世により、セビリヤとコルドバにおける様々な恩恵と8000エスクードを褒美として惜しみなく与えられた。その直後、間違いなく同じ理由で、枢機卿に任命された。廃止されたイエズス会の大学(colegios)は、彼の手にゆだねられた。ピオ6世を教皇に選出した教皇選挙会議では、枢機卿会内の二つの派閥対立を考慮して、全会一致で、セラードが仲介役に任命された。彼は、二派と関係を持ち、両派に通じていたからだ。また、各派が三人の「教皇候補者(papabili)」を推薦し、彼らの中から新しい教皇を選出する案を提示した。この方法は二回失敗した。この一件で、*II Conclave dell, anno1774*とい

う小冊子の中で、ピオ6世の敵方に攻撃された。同小冊子の著者、フィレンツェの司祭 Gaetano Sertor は国外追放され、小冊子は発禁処分となり、焼却された。1789年から1796年には、Boncompagni 枢機卿の後を継ぎ、ピオ6世の副大臣を務めた。1796年に、セラダ枢機卿は、健康状態が不安定になったことを理由に、すべての任務から手を引いた。フランス人によってピオ6世に対して発令された国外追放の間、彼らは、二人の共謀を防ぐために、セラダ枢機卿に教皇のそばに仕えることを禁じた。今度は、彼が国外追放された。失意のさなかにもかかわらず、ヴェネツィアにおいて、ピオ7世を教皇に選出した教皇選挙会議に出席した（1800年）。自らの意思により、San Martín de los Montes 教会（ローマ）に埋葬された。

（『スペイン教会史事典』2811頁，高田雄太 訳）

次に、前掲（b）の『トレド大聖堂の典礼に関する手稿本の蔵書目録』に収められた「セラダ枢機卿文庫」について紹介する。同じく高田雄太氏の訳文にはほぼ全面的に依拠したものである。

スペイン人の血を引く枢機卿、フランシスコ・ハビエル・デ・セラダ（1717-1801）は、ヴァチカンの司書であり（1779）、1789年から1796年まで、ピオ6世の副大臣を務めた。彼は宮殿において、骨董、貨幣、徽章を収集しただけでなく、人知のあらゆる分野にわたる手稿本の貴重な文庫を築いた。それらは、ラテン語、ギリシャ語、アラビア語、トルコ語、ヘブライ語、イタリア語などの写本である。

ロレンサーナ枢機卿の仲介で、セラダの蔵書は、トレドの聖堂に寄贈された（1798-99）。ロレンサーナは、寄贈者からの個人的な贈呈物を所有した。それは、聖歌隊の貴重な交唱聖歌集で、15世紀のイタリアの細密画で飾られ、装丁されていて、セラダの紋章が付されている三巻本である。第一巻（トレド，県立図書館，手稿本，531）の見返しのページには、彼の自筆サインとともに、次のように明記された。

トレド聖堂参事会図書館の蔵書について (井上)

これら三巻の聖歌集は、トレドの枢機卿であり大司教である親愛なるセラダ・フランシスコ猊下から賜った。

トレドにおいて、これらの手稿本は、1808年の蔵書目録に登録された。登録番号が、彼の名前である「セラダ」とともに見返しのページに刻まれた。

この蔵書目録には、百冊以上の写本が記載されている。最も古いものは、10世紀末葉のもので、ペトルス (Petrus) という聖職者によって書き写された聖週間の時に歌う受難曲集 (pasionario) とアラノ・デ・ファルファ (Alano de Farfa) の福音書解説の説教本 (homiliario) である。特に、イタリアの手稿本は豊富で、信仰に関するあらゆる分野の本を擁している。それらを以下列挙すれば、12世紀の交唱聖歌集や読誦本 (antifonarios y leccionarios), 同世紀のアレッツォ (Arezzo) やルッカ (Lucca) のサクラメンタリオ (sacramentarios), 13世紀末葉のペルージャ (Perugia) の典礼定式集 (ritual), 14・15世紀に聖庁 (Curia) やG. ドウランド (G.Durando) が著した教皇や司祭の儀式の行い方を説明した本 (pontificales), ローマカトリック教会やフランシスコ会や聖アウグスティヌス会の聖務日課書やミサ典書 (breviarios y misales) である。メディチ家のファン (Juan de Medicis), 後のレオン10世のローマカトリック教会のミサ典書は、アタヴァンテ (Atavante) の作とされる細密画によって、傑出している。

諸外国の手稿本もあり、それらの中には、Utrechtのミサ典書やMondsee (Baviera) のベネディクト会大修道院の聖務日課書 (breviario), さらに、美しい細密画で飾られた、フランスやフランドルやイタリアの聖務日課の書かれた本 (libros de horas) が豊富にある。

最後に、セラダ文庫には、間違いなくトレドから持ち込まれた手稿本が三冊ある。「本はその運命を持っている (*Sunt fata libelli*)」。それらは、13世紀の、トレドのサクラメンタリオ (sacramentario) と、大司教カリ

ーリヨの紋章が付されている G. ドゥランド (G.Durando) が著した教皇や司祭の儀式の行い方を説明した本 (pontificales) 二冊である。

終わりにあたって、よき蔵書家である枢機卿は、愛情をこめて彼の写本を取り扱った。多くのものは、彼の紋章とともに装丁された。他のものは、原本の装丁を保っている。何冊かは、最もよい状態で保管するために、細心の注意を払って修復された。

(『トレド大聖堂の典礼に関する手稿本の蔵書目録』, 52-53頁, 高田雄太 訳)

以上に挙げた二つの記事によってわかるように、セラダ氏は18世紀にイタリアで活躍したヴァチカンの枢機卿であり、宗教を通じて時の政権にも深くコミットした人物らしく、旺盛な知識欲を備えた、学問的にも傑出した人物であったことが窺える。それと同時に、稀代の蒐集家でもあったらしく、書籍に限らず各種の物品を収蔵していたらしい。「スペイン人の血を引く」が故にスペインにも深い思い入れをもっており、その関係で晩年に蔵書がトレドの聖堂に寄贈され、「セラダ文庫」として名を残すことになったようである。寄贈が行われた1798年当時、セラダ文庫に実際に何冊の書籍が含まれていたかは確認できていないが、その中の一部に、当時恐らくは宣教師の手を介して遙か中国からイタリアにもたらされた書籍が交じっていたことは確かであり、実はその一部が、およそ200年を経た今もなお、聖堂参事会図書館に保管されているのである。次章において、セラダ文庫に交じってトレドに流入した漢籍の種類について、実際に書籍を閲覧した結果を簡単に報告することにしたい。

四 セラダ文庫所収の漢籍について

(一) 現存する漢籍の種類

トレド聖堂参事会図書館には、現在6種類の漢籍が保管されている。それらの書名を、抄写・刊行年代の古い順に、出版書肆、著者・編者などとともに示せば、およそ以下の通りである。

トレド聖堂参事会図書館の蔵書について (井上)

- 1 『大方廣佛華嚴經』 卷第54/1345 (元至正5) 年抄本
- 2 『少微先生高明大字資治通鑑節要』 5・6・7 卷/刊本, 明代?
- 3 『明解増和千家詩集』 3・4 卷/1574 (明萬曆2) 年, 金陵王氏廣勒堂刊本
- 4 『新鐫梅竹蘭菊四譜』 黃鳳池緝/1620 (明萬曆48) 年, 集雅齋刊本
- 5 『妄推吉凶辯』 南懷仁著/1669 (清康熙8) 年刊本
- 6 『坤輿圖説』 下卷, 艾儒著/1674 (清康熙13) 年刊本

(二) 漢籍の保存状況に関する覚え書き

これら6点の漢籍については、書物の表紙もしくは見返しのページ等に記載された「Zelada」の文字によって、その全てが前述したセラード旧蔵書の一部であることが確認できる。前章で紹介した『トレド大聖堂の典礼に関する手稿本の蔵書目録』においても言及されているように、セラード枢機卿の蔵書がトレドの聖堂参事会図書館に寄贈された際、新たな「登録番号が、彼の名前であるセラードとともに見返しのページに刻まれた」とのことである。それは「手稿本」に限定したコメントではあるが、蔵書に含まれていた上記6点の漢籍についても、同様の所作が行われたものと思われる。『トレド大聖堂の典礼に関する手稿本の蔵書目録』の末尾には、更に、「多くのものは、彼の紋章とともに装丁された。他のものは、原本の装丁を保っている。何冊かは、最もよい状態で保管するために、細心の注意を払って修復された。」という記述が見える。ここに言う「修復」が具体的にどの書物に対するいかなる作業を示すかは定かでないものの、保存状態の良くない書物に対しては、寄贈された時点で補強を目的として何らかの手が加えられたことは明らかである。

実際、上記の漢籍の中には保存状態の極めて良くないものもあり、明確な「修復」の痕跡が残されている。例えば、『明解増和千家詩集』のように、破損の進行を防ぐために新たな台紙を用意してその上に一頁ずつ原紙を貼り直したまではよかったのだが、各頁の順番が考慮されないまま恣意的に綴じなおされてしまった結果、夥しい乱丁が発生しているばかりか、甚だしきに至っては天地

も逆になり、殆ど原様を留めていないものさえある。これについては、既に『汲古』第49号（2006年5月刊）誌上に詳細な書誌を含む考証を掲載したので、そちらをご覧いただきたい。また、『少微先生高明大字資治通鑑節要』のように、相当に古い刊本であるらしいことまでは紙質や書誌的事項からある程度推測されるものの、端本であるために現時点では刊行年を明らかにできないものもある。個別の書物に対する今後の詳しい調査が望まれるところであるが、いずれにしても、これら6種類の漢籍は、抄写もしくは刊行された年代が相当に古いものばかりであり、既存の漢籍目録類によっておおまかな調査を行った限りでは、現在までにその存在が全く知られていないか、あるいは存在が確認できるとしても伝本の極めて少ない貴重な書物であることは疑いない。

五 おわりに

以上、トレド聖堂参事会図書館の現況とその蔵書に関して筆者が行った平成17年夏の調査結果の概要を報告した。当該機関には、他の多くの貴重な文献に交じって、6種類の漢籍も保管されていることが判明し、筆者としては所期の目的がある程度達成されたことを嬉しく思っている。ただ、本来ならば、聖堂参事会図書館において実際に漢籍を閲覧するまでの経緯や各々の書物の詳細な書誌、保存の状況、先人によって書かれた調査報告の検証、及びそれによって生じる現存漢籍への疑問、さらには、セラード枢機卿の手に渡るまでに中国から欧州に流入した具体的な経緯、そして何よりも、これら6点の漢籍全体がもつ学術的価値と今後明らかにされるべき課題、等については、詳しく考察すべきところではあるが、問題は多岐にわたる故、現時点ではまだそれら全てについて論じるだけの十分な準備が整っていない。よって、本稿の記述は、トレド聖堂参事会図書館の蔵書の全体的傾向、並びに当該機関に今なお保管されている明清時代を中心とする貴重書6点の概要に関する紹介にとどめ、現存漢籍が投げかける如上の様々な問題に関しては、後日稿を改めて詳細に論じることにした。

トレド聖堂参事会図書館の蔵書について (井上)

2005年11月11日 脱稿

2006年 5月13日 補訂

本稿は関西大学平成17年度在外研究(調査研究)による研究成果の一部である。